研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	トルバプタンを導入する常染色体優性多発性嚢胞腎(ADPKD)患者に対する セルフマネジメント支援の検討				
研究組織	代　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	榊　みのり
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	冨安　眞理
		所属・職名	看護学部・教授	氏名	操　華子
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	榊　みのり

講演題目

トルバプタンを導入する常染色体優性多発性嚢胞腎(ADPKD)患者の
セルフマネジメントに関する文献検討

研究の目的、成果及び今後の展望

【研究目的】本研究の目的は、常染色体優性多発性嚢胞腎(Autosomal Dominant Polycystic Kidney Disease、以下 ADPKD とする)患者のトルバプタン導入に関する文献の系統的レビューにより、トルバプタン導入患者の療養負担感の軽減、生活活動と療養との調整、及び QOL 向上をめざす多職種連携の支援への示唆を得ることである。ADPKD 患者は、約半数が 60 歳代までに腎機能悪化によって透析・腎移植等の腎代替療法が必要となる。国内の透析導入する原因疾患の約 3%を占める、最も頻度の高い遺伝性疾患である。わが国では、2014 年 3 月から ADPKD 患者に対してトルバプタンを用いた保険診療が開始され、クレアチニンクリアランス 60mL/min 以上かつ両腎容積 750mL 以上の ADPKD 患者で、腎容積増加・腎機能低下を抑制する効果が示され、透析予防が期待されている。トルバプタンは、服用に伴って強い水利尿作用による多飲と多尿を生じるため、導入時はまず入院環境で治療管理をチーム医療で確立し、その上で患者個々の生活活動との調整を教育する。しかし、臨床経験上、トルバプタン導入患者は退院後の療養で様々な障壁に直面しており、多職種の連携により療養支援に取り組む必要があると考える。

【方法】検索データベースは医学中央雑誌 Web 版(ver.5)、PubMed を用いた。「ADPKD」「Tolvaptan」と、「Self-Management」及び「セルフケア」の用語による検索は 0 件であった為、「ADPKD」「Tolvaptan」に加え、トルバプタン導入患者における療養の障壁に関して系統的に検索するためのキーワードを検討し、検索式（忍容性・副作用・医薬品副作用と有害反応・服薬アドヒアランス）を構築した。分析方法として、各文献のトルバプタン導入における療養の障壁で重要な示唆となる部分を抽出し、それらを単文化して質的コーディングを行い、カテゴリー名を検討した。

【結果】19 文献が検出され、設定した適格基準に基づき、12 文献が対象となった。先行研究の知見を統合した結果、【トルバプタン服用による有益性と有害事象との調整】【水利尿関連の有害事象への対処】【薬剤性肝障害の予防と早期対処】【長期的視点からのトルバプタン服用の意思決定】の 4 カテゴリーが生成された。

【結論】これまでの ADPKD 患者に対するトルバプタン服用に関する臨床試験により、長期的な安全性・有効性についてのエビデンスは確立してきたが、トルバプタン導入患者における療養負担感の軽減、生活活動と療養との調整、及び QOL 向上に資する患者教育プログラムの実施とその効果を検証した研究は見当たらないため、今後の研究によって明らかにする必要がある。